
クリスマスイブの木の下で

Y

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クリスマスイブの木の下で

【Nコード】

N7220M

【作者名】

Y

【あらすじ】

浅野伊吹は平和に暮らす少女でした。

12月24日、それは彼女の誕生日。

彼女曰く「ダブルでめでたい」その日は幸せに過ごつもりでした。しかし家族の反応が・・・？

あるすがすがしくもなんともない、平凡な、むしろちょっと寝起きの悪い朝。

私、あさのいぶき浅野伊吹は中学三年生。

今日は凄く寝起きが悪かった。

身体をおこすのが凄くだるくて、たぶん疲れてるのかな・・・。

そんな朝だけれど、今日は実は平成22年12月24日。

クリスマスイブだ。

今日、この日はクリスマスイブということだけではなく私の誕生日でもある。

いつも小さなころからクリスマスプレゼントと誕生日プレゼントが兼用で

文句を言ったりしていることがあった。

今ではもういい加減慣れたけどね。

さてさて、そんなダブルでおめでたい日の今日はいくら寝起きが悪かったといっても

テンションはあげずにはいられない。

なにしろ二つのめでたい日が重なるのだ。

そんなわけでそんじょそこの家のパーティよりもちよっぴり盛大（と、私は思っている）なのだ。

時計を見るともうお昼手前。

そろそろ家族のみんながパーティの準備とかしてるかな？

よし、手伝ってあげようと。

リビングにいくとお母さんがいた。

あれ、まだ準備ははじめていないみたい。

お母さんはソファに座ってテレビを見ている。

「おはようお母さん」

とりあえず後ろから声をかけてみる。

ふいに台所からカチャン、と皿の音がした。

重ね置きしてるからずれたのだろう。

お母さんはこちらに振り向き、私の顔をみるとため息をついた。
え？なんで？

とりあえず自分に非がないか模索してみる。

・
・
・

・
・
・

・
・
・

ああ、そういえばちょっと前になにか凄く謝らなきゃいけないこと
した気がする。

なにかは忘れたけど、「ごめんなさい」といわなきゃいけないくら
いのことだ。

きつとお母さんになにか迷惑をかけたのだろう。

寝起き最悪の私の頭はつい最近のことすら覚えていないらしい。

まあとにかくなにか悪いことをしたのは覚えている。

きつと機嫌が悪いんだな・・・。

でも、きつとパーティになったら笑顔で許してくれるにちがいない。そう思った私はいまこれ以上は話しかけることはせず、自分の部屋へ戻ることにした。

その途中でおねえちゃんとすれ違った。

いま起きてきたのだろうか、凄く眠そうな顔だ。

おはよう、と声をかけようとしたところでおねえちゃんにスルーされた。

あれ、そっぴや確かおねえちゃんとも喧嘩したんだっけ？
なにか謝らなきゃいけないことがあったような？？？

この歳でボケなんて嫌だな・・・つい最近のことを覚えていないなんて。

そんなこんなでめでたい日の朝はちよつと不機嫌そうな二人に話しかけないようにしただけだった。

「なによなによ、二人してこんな日にまで怒らなくなっただけいいじゃない！」

ふてくされながら家の廊下を歩く私。

いや確かに私が怒らせたとおもうんだけど、覚えてないくらいだから些細なことなんでしょ？

こんな日にあんな態度されるとこっちまでむっときちゃう。

ふと、姉の部屋の前で私は立ち止まる。

ドアは開いており机には見覚えのある本があった。

「これ・・・私のパティシエの本じゃない」

そう、私の夢は一人前のパティシエになること。
いまのうちから勉強しておこうと買った本だ。なぜこれが姉の部屋の机に？

・・・そうか、怒らせた腹いせに盗まれたんだ。
それも勝手に私の部屋に入って。

いや確かにいま私も同じ行為におよんではいるがこれは単に自分の私物を取り戻しにきただけであって
姉のものを盗もうというわけではない。

正当化の方面で話がまとまったところで私は本を取り戻し自室に戻った。

この家にいまいても居づらいだけなのでお出かけすることにした。

「さーと、どこいこうかなあ」

とりあえず家をでた私。

目的もなく出てきたのでいきなり立ち往生することになった。

「暇つぶしといえば・・・本屋だよねっ！」

読書もわりと好きな私は本屋にて時間をつぶすことにした。
歩く、歩く、とにかく歩く。

わりと都会なこの町は車通りも多い。

エンジン音がぶんぶんうるさいくらい車が走っている。

「でねー、私元旦が誕生日なんだー」

ふいに話し声が聞こえた。

すぐそこに私と同じ年くらいの女の子が二人いた。

待ち合わせでもしてるのだろうか、雑談しながら携帯もいじりながら立っていた。

「ほんと？めでたいねー、なにかプレゼントするね」

「うん、ありがとー」

そんななにげない会話。

なによ、誕生日のめでたさだったら私だって負けてないもん。

・・・その誕生日が誰も祝ってくれない最悪の日になりそうだけど。
そんな話を聞いているだけでも悲しくなってくるだけなので、さ
まその場を退散することにした。

さて、もう本屋はすぐそこだ。

もうその交差点を右にまがったら到着だ。

交差点の脇にそえられた花を踏まぬように気をつけながら道を曲がる。

「ふう、到着っ」と

とりあえず目的の場所にたどりつくことができたので一息。

なにが悲しくてこんな日に一人でこんなところに来なければいけないのだろうか。

もういいよ、むなしいけど、かなしいけど、今年はもう・・・諦めよう。

・・・ちぐはぐな家族の関係。

いや、暗いこと考えるのはよそう。

開き直った私は本屋へと入っていった。

本屋のなかにはたくさんのマンガがあった。

凄くテンションは低いけれど、ちよっとは紛らわせることができそうだ。

「よっし、あそこの端っこからかたっぱしに攻略しよう!」

根は別に暗くない、いやむしろ明るいタイプの私はグツと拳をにぎりしめると

狙い定めた本棚の端から本をよんでいくことにした。

・・・

・
・
・

・
・
・

さて、何時間たっただろうか。
いまはもう本棚のラストにさしかかろうところだ。

今読んでいる本の内容はこうだ。
あるひ誕生日をむかえた主人公がいた。

みんなからのお祝いに期待していたがみんなはへえー、とか、ふーん、とか

そっけない態度をとるのだ。

ふてくされた主人公はそこらウロウロつきまわり、後に家に帰ることにした。

家に帰ったその瞬間、クラッカーの大きな音とともに友人や家族からの

「誕生日おめでとう！」

の言葉におもわず感極まる主人公。

そう、みんなはサプライズがしたかったからそっけない態度をとっていたのだ。

見事それは成功し大団円を迎える・・・という話だった。

「・・・これだっ！」

なにやら嬉しそうな表情をする伊吹。

この主人公と自分を重ねたのだろうか？

「露骨にスルーしてきたのはこれのせいだったのね」

そうだ、なにしろ不自然すぎた。

きつとあれは怒っていたのではなくこれと同じサプライズをするための付箋だったんだ。

ならば悪いことをしてしまった・・・なにしろサプライズに気づいてしまったのだから。

もう夜だ、今私が帰ればみんなパーティの準備をして待っていることだろう。

よし、みんなをショックにさせないために驚いたふりをしてやろう。驚かないと、サプライズは仕掛けた側が楽しくないもんね。

全てに気づいた私は早足、いやもしかしたら走っていたかもしれない速度で

家へと向かっていった。

走る、走る、とにかく走る。

家が見えてきた。

ふう、まずは呼吸を整えて・・・と。

どんな風に驚いてやろう？

今皆の中で私は一応しょんぼりして家に帰ってきているという設定のはずだ。

そこで玄関でクラッカーとともにお祝いの言葉を送る。

すばらしい作戦だ。私にこんなことを仕掛けてくれるみんなにとても嬉しく感じる。

精一杯驚いてやりたい。

そうだ、あの主人公のように驚いてやろう。

「な、なんだなんだっ!？」

家の前で演技する私。おもわず顔が笑ってしまう。
よし、これでいこう。

まずは表情を暗くして・・・。
そして、深呼吸して・・・。

いち

にの

さんっ！

「ただいま・・・」

できるかぎり表情を暗くしてドアを開ける。

おもわずにやけてしまう顔を必死にこらえながら・・・。

「・・・」

・・・あれ。

玄関が真っ暗だ。

というか部屋の中が真っ暗。

誰もいない。

不自然なくらいに。

そうか、息をひそめているんだ。

玄関は狭いからたぶんリビングかな。

リビングのドアを開けたら・・・よし、次はにやけないように・・・。

「・・・ただいま・・・」

ほら、クラツカーの音がくる。

わかっていても大きな音だからびっくりしちゃうかも・・・！

「・・・」

誰も・・・いない？

・・・

・・・

・・・

耳をすます。

でも物音ひとつしない。

パーティができる部屋はここくらいしかないのに装飾一つすらない。

「・・・そういえば」

そうだ、お父さんの車がなかった。
今日は仕事は休みのはずだ・・・。
これって・・・もしかして・・・。

「今年は・・・外食・・・？」

みんな私を置いていった・・・？

嘘・・・でしょ・・・？

私が、怒らせたから・・・？

おぼえてはいなけど、悪いことをしたから・・・？

そんなのってないよ・・・いくらなんでもひどいよ・・・

今日は、今日は・・・一年に一回の・・・。

おめでたい日が二つの・・・。

私の誕生日・・・。

みんな私を置いて行って・・・そんなのって・・・

「そんなのってないよお・・・!!」

くやしさと、かなしさと、色々なものが混ざり合って、涙が流れた。

私が・・・悪いの？

こんなに酷いことさせるくらい私がなにか悪いことをした・・・？

「だったらっ！」

涙をとめることはできない。

「謝るからっ！」

あふれる感情がコントロールできない。

「私の一年に一度の誕生日を・・・誰か・・・」

あまりにぐるぐる回る感情でめまいする。

「誰か・・・お祝いしてよお・・・!!」

思わず地面にすわりこんでしまう。

クリスマスイブの夜。

誕生日の夜。

自分以外誰もいない家で。

ただ泣いた。

「ごめんなさい・・・ごめんなさい・・・!!」

その言葉を、ずっと続けながら・・・。

しばらく泣いたあと・・・一時間くらいだろうか。
もう涙を出し尽くした伊吹は真っ暗な部屋で座っていた。

「みんな・・・いまごろ楽しく外食しているんだろうな・・・」

ご馳走を食べて、私の愚痴とか・・・言いながら。

「・・・みんな大っ嫌い」

そう毒を吐くと伊吹は立ち上がった。

こんな気分が晴れない日は、あそこへいこう。

私が好きな場所。

家から結構歩いたところに小さな土手がある。

私が生まれたっていう病院も近くにある土手。

その土手に大きな木が一本あって、ちょっと工夫すれば一番上までにだって登れる。

私はそこから見る景色がとっても好き。

なにか嫌なことがあったらあの木へ登る。

登るうちに嫌なことを忘れて楽しくなって。

綺麗な景色をみてこれからを頑張ろうって、いつもそうして自分を励ましてきた。

立派なパティシエになることを夢見て・・・。

さて、しばらく歩いて目的の土手が見えてきた。

「今日はクリスマスの装飾とかあるから、いつもより景色がもっと綺麗かも」

なんてちよつと元気をとりもどしつつ土手へ向かう。

目的の木が見えてきた・・・けど。

「誰がいる？」

そう、いつもは誰もいない木。

たくさんの方がいるのだ。

最悪の気分だ。

きっとクリスマスだからということであそこでパーティをしている人たちがいるのだろう。

あれじゃ、部外者の私はあの一帯に近づけないではないか。

とりあえず木に近づく私。

話し声はするけど・・・なんだろう、妙に静かなような・・・？

「いつ・・・この木が好き・・・だな」

「ええ・・・いつも・・・来て・・・のよ」

「ほんとに・・・この木・・・なんだね」

ちよつと聞き取りにくいが、どうやらこの木が好きだとか、そういう話。

私と気が合うかも。

そんなことを考えながら影に隠れている伊吹。

「じゃあ・・・そろそろ帰ろうか」

「そうね・・・お花も供えたしね」

その人たちはあつさり帰ってしまった。

「なんだ、パーティとかじゃなかったんだ」

きつとパーティの帰りとかにちよつと寄つてこの木が好きだ、とかそんなことを

言っていただけなのかもしれない。

理由はなんにせよ木の周りには誰もいなくなったのでこれで登ることができる。

そう期待に胸を膨らませながら木に近づくと・・・。

「なにこれ・・・花？」

やけに真新しい花が根元に置いてあつた。

さっきの人たちが置いていったのだろうか？

一体なんのために？

「それにこのでっかい石・・・こんなあつたっけ？」

見覚えのない大きな石。

木の裏側に回つてみるとおおきな石があつたのだ。

なにか、書いてある。

「えっと、なにになに・・・」

――浅野伊吹

H 19 / 12 / 24

死去――

「・・・え？」

これ・・・私の名前・・・？

そんなバカな、バカなバカなバカなっ！？

私は生きているではないか、気持ち悪い悪戯だ。

そうか、いつもわたしがここに来ていることをよくおもわないやつの嫌がらせにちがいない。

お墓・・・にしてはそっけない、安い造りっぽかったので簡単に壊せそうだ。

今日は嫌な気分だったのだ。

こんなものキックして壊してしまおう。

「・・・えいやっ!!」

掛け声とともに墓？にむかってキック。

その反動が足に・・・。

・・・こなかった。

石をすり抜け、私の身体はそのまま倒れこむ。

バカな、そんなはずがない。

もう一度!!

あたらない。

もう一度!!

あたらない。

このっ！！

あたらない。

あたらないあたらないアタラナイアタラナイアタラナイ。

「・・・夢か・・・」

そうだ、これは夢だ、たちの悪い・・・夢。

認めたくない・・・認めてたまるか。

「私が・・・死んでる？」

認めてみる、浅野伊吹。

そうすれば私の今日の行動に全てつじつまがあうのだ。

皆私が見えていない。

私がこの木を好きなことを知っているのは家族だけ。

今日、この日に供えられた花。

さっきの人たちはお母さんたち？

・・・追いかけよう。

認めたくない、どうなってる？

家族に会いたい。

会って「伊吹」って私の名前を呼んでほしい。

走る、走る。

・・・見つけた。

お母さんとお父さんとお姉ちゃんだ。

「みんなっ！！」

大きな声で叫ぶ。

お姉ちゃんが振り向いた。

私を見て目を丸くしている。

「・・・どうしたの？」

お姉ちゃんに声をかけるお母さん。

「・・・いや、いま伊吹の声がしたとおもったから・・・」

「案外、そうかもしれないぞ？今日は・・・命日だからな。」

・・・嘘・・・嘘・・・！

嫌っ・・・やめてっ・・・！！

みんな意地悪しているだけなんですよ？

お姉ちゃんに触れるため手を伸ばす。

・・・届いた。

届いたけど・・・。

触れることはなく、私は倒れこむ。

何度も何度も触れようとして、触れられなくて、倒れこむ。

「違う・・・違うっ！私は・・・私は死んでなんかっ・・・！！」

ふと顔をあげるとみたことのある風景。

ああ、本屋の近くの・・・交通量が多い交差点か。

・・・待て。

なにかいつもと違うことがある。

交通量が多い？

いつものことだ、この町は。

本屋の近く？

いつものことだ、今日も来た。

じゃあ・・・じゃあ・・・なんだ？

この交差点の脇に供えられた花は・・・なんだ・・・！？

なにか事故でもあったのか、でもそれは私なんかとは関係ないはず・
・・。

「ここで・・・伊吹は・・・」

お父さんが急に口を開ける。

「ええ、私が・・・あんなしょうもないことをしようなんていわなければ・・・」

お姉ちゃんが言う。しょうもない・・・こと？

「あまり自分を責めないの・・・伊吹が死んだのはあんたのせいじゃないわ・・・」

お母さん・・・？

「憎いわ・・・ここで伊吹をひき殺したやつがっ!!」

――全てのピースが繋がった――

すべて思い出した。

たしかあれは三年前・・・平成19年のクリスマスイブ・・・私の誕生日。

楽しみにしていた特別な日にみな急にそっけなくなったのだ。

なぜだろう？

自分はなにもししていないはずなのに・・・。

みんなに酷いことを言った。

バカだとか、死んでしまえ、とか。

家族みんなにいった。

それですねた私は・・・木に登りにいった。

日も暮れるころ、バカバカしくなって家に帰ることにしたんだ。

暴言を吐いたことに謝ろうとしてたんだ、私は。

急いで帰ろうと走っていた。

それでも信号は守っていた。

でもその帰り道・・・あの交差点で・・・私は・・・。

そうだ・・・トラック・・・トラックに轢かれて・・・。

死んだんだ。

いや、死んだかとおもった。

救急車で病院に運ばれた私は緊急手術を受けた。

そのとき私は・・・ずっとこんなことをつわごとのように繰り返していたんだ。

「ごめんなさい、ごめんなさい・・・」

ずっと謝りたかった・・・。

バカだった。

あんな暴言を吐いて・・・。

でも、なぜみんな急にそっけなく・・・？

・・・ああ。

そうか、そうだったのか。

私は3年経ってようやく気づいたんだ。

みんなの、サプライズパーティに。

バカだ・・・私は・・・本当にバカだ・・・。

「愛美^{なみ}、まだ勉強しているの？」

愛美と呼ばれた少女は回転イスで身体を振り向かせると

「うん、あともうちょっとだけ」

そういうと机にむかいペンを走らせる。

「そう・・・無理しちゃ駄目よ。」

ばたん、とドアが閉じられる。

「伊吹・・・ごめんね・・・」

「伊吹、あなたのパティシエの夢・・・おねえちゃんが叶えて見せるから・・・」

愛美の机の上には、一冊の本。

（後書き）

クリスマススイブの木の下で、いかがでしたでしょうか？

このお話は作者が暇な時間に思いつきで書き始めたものです。

小説を書くのはまったく不慣れなものでしたがなんとか書ききれてよかったと思います。

さて、主人公の伊吹ですが一応名前の由来はあります。

今回のテーマ、クリスマススイブと木をあわせまして

イブと木、で伊吹です。

・・・ひねりがないですね、はい。

今作は短編物でしたが今後執筆するものは同じ世界観のものつもりですので

よければまた、作者の至らない文章を読んでいただけると今作の見た方も

違ってくるかもしれません。

では、ここまで読んでいただいた方ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7220m/>

クリスマスイブの木の下で

2010年11月5日21時35分発行